

「テイル」構文の意味と曖昧性

The Meaning Ambiguity of Japanese *teiru*-Construction

吉川 洋

Hiroshi YOSHIKAWA

This paper will clarify the ambiguity which the *teiru*-construction in Japanese produces. A Japanese sentence in *teiru*-construction has sometimes two or three meanings. For example, the sentence 'Taro-ha-the U.S.-ni-itteiru' has at least the following two meanings: one is that Taro has been to the U.S., and the other is that Taro has gone to the U.S. and so he is there. How is such a sentence analyzed to have two meanings? In this paper, semantic structure is assumed to solve the problems. And the ambiguity of the sentence will be clarified on the basis of the semantic structure proposed in this paper.

I. 序

本稿では、例えば、二つの英文が、一つの日本語に対応している次の(1)(2)の日本語と英語の間に見られる曖昧性に関する考察を通じて、日本語の「テイル」構文の分析を行う。

- (1) a. A ship is sinking now.
b. A ship lies sunk now.
c. 船が、今沈んでいる。
- (2) a. Leaves are falling.
b. Leaves are fallen.
c. 木の葉が、落ちている。

(1a)と(2a)は発話時現在での動作・作用の継続を表す〈現在進行〉を、(1b)と(2b)は一つの事態・出来事の終了後の状態変化の残存を表す〈結果状態〉を表している(安藤(1983:241)、今井(1995))。他方、日本語の(1c)と(2c)は、一つの「～ている。」の構造を持つ表現(以下、「～ている。」表現と略す。)が〈現在進行〉読みと、事態・出来事の完了後の〈結果状態〉の読み二つに対応している。つまり、一つの形式を持つ「～ている。」表現が、二つの異なる形式の英文に対応しており、曖昧性が存在すると言える。なぜ、このような事が生じるかが、一番目の疑問点であり、解決すべき問題である。

二番目の疑問点は、(1c)(2c)の「～ている。」表現は

二つの読みが可能で、曖昧文であるが、次の(3a)の「～ている。」表現は〈現在進行〉の読みはなく、〈結果状態〉のみの読みしかない。それは、なぜなのか。また、それはどのような要因によるのか。

- (3) a. その時計は、今壊れている。
b. The watch is broken now.

「壊れる」も「沈む」や「落ちる」と同様に状態変化を意味する「ナル」の意味特性を持つ(「ナル」型)自動詞(影山(1996)、吉川・友繁(2008)参照)であるが、(1a)(2a)の文は、〈現在進行〉の読みを持ち、(3a)の文はその読みを持たない。すなわち、(3a)の「今～ている。」表現は〈現在進行〉の読みがなく、〈結果状態〉の読みしかない。これは、どのような要因で生じるのであろうか。また、逆に、次の(4)の「今～ている。」表現は、〈現在進行〉の読みを許すが、〈結果状態〉の読みを許さない。それはなぜなのかという問題もある。

- (4) 今、太郎は旅をしている。

これらの疑問点・問題点を解決する糸口は、三原(1997)が示すように、動詞が表す意味特性(例えば、「スル」「ナル」)と関連しているようである。この関係を解明するのが、第二の課題である。さらに、(1c)の

「今～ている。」表現、(3a)の「今～ている。」表現及び、(4)の「今～ている。」表現の意味の違いは、どのような道具立てによって表すかが問題となるが、本稿では、この問題にも取り組む。

三番目の疑問は、「アメリカに行っている。」の文(5a)には、次の(5b)(5c)(5d)の三つの解釈が可能である。

- (5) a. 太郎は、アメリカへ行っている。
- b. アメリカへ行く途上にある。
=He is going(is on the way)to the U.S..
- c. アメリカへ行き、アメリカにいる。
=He went to the U.S. and is there now.
- d. アメリカへ(以前に)行ったことがある。
=He has been to the U.S..

(5a)の文に対して、(5b)のような〈現在進行〉の読み、(5c)のような〈結果状態〉の読み、(5d)のような現在より過去への回想の読みが可能である。なぜ一つの「～ている。」表現に対して、このような三つの読みが可能なのか。また、これらの各読みの違いを、どのように示しえるかが問題である。本稿では、意味構造を建て、その構造によって読みの違いを示すことができることを論じる。その場合、読みの違いを明らかにするためには、どのような意味構造を設定するかが問題となる。例えば、次の二つの文・表現における意味の違いを、どのような意味構造の違いで表すかである。

- (6) a. 太郎は、昨晚芋を食べている。
- b. 太郎は、今芋を食べている。

(6a)(6b)の二つの文が表す動詞句は、全く同じである。表面上(表層)の違いは、(6a)は「昨晚」によって示されるように過去を表す副詞と共起し、文(6b)は「今」によって現在の状況を示す副詞と共起している点のみである。すなわち、(6a)と(6b)の違いは、時の副詞のみで、それ以外の部分は、全く同じである。しかし、これらの二つの文が表す意味の違いは、明白である。(6a)は過去への回想(もしくは、経験)の意味を表し、(6b)は現在の進行状況を表している。このように、共起する副詞の違いが、なぜ意味の違いを引き起こすかを明らかにする必要がある。¹本稿では、この意味の違いを明示する手段として、各読みが表す意味構造を想定する。

以上の問題点や疑問点を、動詞が表す意味特性と各読みが表す意味構造に基づいて考えて行く。

II. 「テイル」の意味

まず最初に、「～ている。」の意味を考えてみよう。日本語の「～ている。」表現(この表現に文が埋め込まれた構文を「テイル」構文と呼ぶ。)は、色々な動詞と結び付くことにより、様々な意味を表すことが出来る。(7)a～cは、動作や作用の継続を表し、(8)a～cのように過去に起こった事態・出来事後に生じた状態変化の結果残存を表し、(9)a～cは過去に起こった出来事を現在より眺め、現在と関連させていることを表している(金田一(1976)、藤井(1976)、吉川(1976)、鈴木(1976)、三原(1997)、池上(2000)、水谷(2002)、高見・久野(2006)参照)。

- (7) a. 太郎は走っている。
- b. 太郎はカートを押している。
- c. 落ち葉が舞っている。
- (8) a. 窓ガラスが割れている。
- b. ドアの鍵が壊れている。
- c. 飛行機が到着している。
- (9) a. 太郎は多くの本を読んでいる。
- b. 太郎は3度アフリカへ行っている。
- c. その自動車は3万キロ走っている。

以下、(7)が表す動作・作用の継続を〈進行〉(もしくは、〈進行〉の読み)、(8)が表す事態・出来事後の現在までの結果残存を〈結果〉(〈結果〉の読み)、(9)が表す過去に起こった出来事を現在より眺め、現在と関連させることを〈回想〉(〈回想〉の読み)と本稿では呼ぶことにする。

また、(10a)(11a)の各文の「～ている。」表現には、少なくとも(10b)(10c)及び(11b)(11c)の二つの読みが許される。

- (10) a. 船が、沈んでいる。
- b. 船が、海底へ沈んでいる。
- c. 船が、海底に沈んでいる。
- (11) a. 紅葉の葉が、散っている。
- b. 紅葉の葉が、公園で散っている。
- c. 紅葉の葉が、公園に散っている。

「に」格助詞によって着点が表され(影山・由本(1997))、(10c)は船がすでに海底に達している読み、及び(11c)は紅葉の葉が散り、公園の地面に達し、そこに存在する読み、すなわち、事態・出来事後の〈結果〉の意味が与えられる。他方、(10b)は「へ」格助詞で方向が表され、海底の方向に向かって沈んでいく事

(17) 太郎は、大阪10年前から住んでいる。

あるタイプの動詞句（例えば、(5a)の「アメリカへ行っている。」の動詞句）では、効力持続の読み(5a)と結果持続の読み(5c)の両方が可能である。しかし、結果持続の読みと効力持続の読みは、どのような違いがあり、どのようにしてその違いが生じるのか、また、どのようにその違いが明示されるのか、これらの点について、三原(1997)では明白でない。以下で、その違いを明白にし、その違いを意味構造によって示し、問題の解決を図る。

もう一つの「テイル」構文に対する三原(1997)の分析の問題・疑問は、次の点である。三原(1977:114,122)は、〈結果〉の読みは主語の状態変化が生じた場合に限定している。

- (18) a. 電灯が消えている。
b. タクシーが来ている。
c. 空が晴れ上がりライトブルーになっている。
d. 花瓶が割れている。

しかし、次の各例においては〈結果〉の読みを主語の状態変化に限定すべきなのか疑問である(高見・久野(2006)参照)。

- (19) a. 太郎は、自分の部屋に鍵をしている。
b. その子は、教科書にしおりをはさんでいる。
(高見・久野(2006))
c. 花子は、(今は)窓を閉めている。

以上のような文では、目的語の状態変化にも〈結果〉の読みが可能である。すなわち、(19a)は「太郎の部屋は、今は鍵がかかっている。」、(19b)は「教科書にしおりがはさんである。」、(19c)は「窓は閉まっている。」をそれぞれ意味し、各目的語における状態変化の意味がある。²

三原(1977)の分析は意味素性(結果性、継続性)に基づいており、結果持続と動作持続の解釈(読み)はうまく説明される。しかし、効力持続についてはなぜ動詞の意味素性に関わらないのか明らかにされていない。さらに、効力持続は、動詞が持つ意味特性・意味素性にまったく関係ないのか、また、結果持続と効力持続の違いは、どこにあり、その違いはどのように表されるのかということについても、三原(1997)では明らかにされていない。以下で、これらの疑問・問題の解決を試みる。

IV. 「テイル」構文の意味構造

以上の疑問・問題解決を図るために、〈進行〉〈結果〉〈回想〉の各読みに対し、どのような意味構造を設定すべきかを本節で考えていくことにする。

IV-1. 〈進行〉と〈完了〉の意味構造

「テイル」構文がどのような条件の基で、どのような読み(意味解釈)になるか。また、その読みはどのような意味構造として与えられるかに関するこれらの問題に取り掛かろう。その第一歩として、まず各読み(〈進行〉〈結果〉〈回想〉に限る。)の違いを、どのような意味構造で表すべきかを考えてみる。

最初に、「テイル」構文が表す〈進行〉、〈結果〉及び〈回想〉の読みの違いが、どこにあるかを、次のような観点から考えてみる。すなわち、各読みが表す事態は、発話時現在とどのような時間関係にあるかを考えてみる。この観点より見れば、〈進行〉に見られる特徴と、〈結果〉と〈回想〉に見られる特徴に大きな違いが見られる。その違いは、〈進行〉は発話時現在で事態そのものが存在しているが、〈結果〉と〈回想〉は発話時現在で事態そのものは完了・終了しているという点である(三原(1997:183))。このような発話時現在で完了・終了していることを表す事態を、〈完了〉と名付ける。すなわち、〈完了〉は〈結果〉と〈回想〉の上位に位置づけられる読みと考える。

- (20) a. 〈進行〉：発話時現在で、事態そのものが存在する。
b. 〈完了〉：発話時現在で、事態そのものが終了している。

事態そのものが発話時現在に存在している場合、事態は発話時現在での事態であるため、その事態を表す文を現在時制の文(〈現在の文〉と略す。)で表記する。また、事態そのものが発話時現在で過去に終了している場合、事態が発話時現在で過去であるため、その事態を表す文を過去時制の文(〈過去の文〉と略す。)で表記する。

- (21) a. 〈現在の文〉：発話時現在で、事態そのものが存在していることを表す文
b. 〈過去の文〉：発話時現在で、事態そのものがすでに完了・終了していることを表す文

「テイル」構文の意味構造は、〈現在時の文〉もしくは〈過去時の文〉が「テイル」に埋め込まれた構造であると考えられる。従って、本稿では〈進行〉と〈完了〉を表す文の意味構造は、次のような構造をなしていると想定する。

- (22) a. 〈進行〉の意味構造：
 〈現在時の文〉 + 「テイル」
 b. 〈完了〉の意味構造：
 〈過去時の文〉 + 「テイル」

これら二つの意味構造の違いは、対象事態の成立が発話時現在との関係でいつであるかによる。すなわち、これらは次のような条件が整った時、与えられる構造であるとする。

- (23) 「テイル」の意味構造条件 (I)：
 a. 発話時現在で事態そのものが存在する場合、その意味構造は (〈現在時の文〉 + 「テイル」) であり、〈進行〉の読みが与えられる。
 b. 発話時現在で事態そのものがすでに終了している場合、その意味構造は (〈過去時の文〉 + 「テイル」) であり、〈完了〉の読みが与えられる。

この意味構造条件 (I) に基づいて、次の (24a) の文が表す (24b) (24c) の読み (意味) の違いを考えてみよう。

- (24) a. 船が、今沈んでいる。
 b. 船が、今海底へ沈んでいる。
 c. 船が、今海底に沈んでいる。

(24a) の「～ている。」表層表現 (表層文) は、(24b) (24c) の解釈が可能である。格助詞「へ」は方向を表しており、事態そのものが発話時現在で存在していることを表している。格助詞「に」は着点を表しており、発話時現在で事態そのものはすでに完了・終了していることを表している。従って、「テイル」の意味構造条件 (I) によって、(24b) は〈進行〉の意味構造が与えられ、(24c) は〈完了〉の意味構造が与えられる。(24b) (24c) の意味の違いは、埋め込み文の時制の違いによって示され、次の (25b') (25c') の意味構造を持つ。

- (25) b'. 〈船が沈む 〈現在時の文〉〉 + 「テイル」
 ⇒ 〈進行〉
 c'. 〈船が沈んだ 〈過去時の文〉〉 + 「テイル」
 ⇒ 〈完了〉

ここで問題となるのは、時の副詞「今」の修飾関係がどのようになっているかという点である。(25c') の意味構造で、副詞「今」が修飾できる整合性のある構成要素は、現在時での継続性を表す「テイル」である。すなわち、「今」は「テイル」を修飾し、それと結び付いていると考える。副詞「今」が「テイル」と結び付くことによって、「テイル」で表される今の継続状態に記述の焦点・中心が置かれる。発話時現在に読みの中心があるこの意味構造を、次のように表す。

- (26) 発話時現在に焦点を置いた〈完了〉の意味構造：
 〈過去時の文〉 + 「今…テイル」

(25b') の意味構造を持つ (24b) の場合、副詞「今」はどこを修飾していると考えられるべきか。(25b') の場合、発話時現在において事態そのものが存在しており、その現在の事態に焦点が置かれていると考えられるので、「今」の副詞はその埋め込み文 (〈現在時の文〉) を修飾していると考えられる。従って、〈進行〉の読みの意味構造を、次のように改める。

- (27) 〈進行〉の意味構造：
 〈今 + 現在時の文〉 + 「テイル」

以上の二つの意味構造によって、「船が、今沈んでいる。」の文の曖昧性 (二つの読み) が下記のように表示される。

- (28) a. 〈今 + 船が沈む 〈現在時の文〉〉 + 「テイル」
 b. 〈船が沈んだ 〈過去時の文〉〉 + 「今…テイル」

この「今～ている。」形をした表現は、副詞「今」 (以後、表層表現での「今」を「今～」と記す。) の修飾関係によって二つの読みが可能となり、曖昧性を生む表現となる。一つは、埋め込み文そのものを修飾し、事態に焦点を置いた場合 (28a) と、もう一つは、「テイル」そのものを修飾し、現在時「今」での継続事態に焦点を置いた場合 (28b) である。³

- (29) 「今～ている。」表現の曖昧性：
 a. 「今～」が埋め込み文を修飾した意味構造：
 〈今 + 現在時の文〉 + 「テイル」
 b. 「今～」が「テイル」を修飾した意味構造：
 〈過去時の文〉 + 「今…テイル」

IV-2. 〈結果〉と〈回想〉の意味構造

次に〈完了〉の下位読みである〈結果〉と〈回想〉の違いを、意味構造でどのように表されるかを見てみよう。まず、両者が表す意味の大きな違いはどこにあるかを調べてみよう。

- (30) a. その時計は、壊れている。
- b. その時計は、今壊れている。
- c. その時計は、10年前に壊れている。

(30b) (30c) の読みの違いは明らかである。(30b) は今壊れている状態にあることを表している出来事の〈結果〉の読みであり、(30c) は10年前に壊れた出来事があったことを表す〈回想〉の読みである。その違いはどのような要因により、どのような意味構造で表されるかが問題である。この問題に取り掛かるにあたって、(30b)と(30c)の共通点と相違点がどこにあるかを見ることから始めてみよう。まず気づく共通点は、(30b)(30c)の両文が表す意味は、発話時現在で「壊れる」の事態はすでに終了しているという点である。従って、「テイル」に埋め込まれる文は、すでに終了していることを表す〈過去時の文〉である。

これらの両文の相違点は、(30b)は副詞「今～」、(30c)は副詞「10年前」と共起している点である。この違いをどのように考え、分析し、それをどのように意味構造に表すかが問題である。本稿では、この違いを記述の焦点の置き方の違いと考える。すなわち、(30a)は、焦点の置き方の違いで、(30b) (30c)の読み(解釈)が生じると考える。(30b)は記述の焦点を今の状態においた読みと考え、(30c)は記述の焦点を過去の出来事そのものに置いた読みと考える。(30b)のような読みは、状態・位置変化を起こした後の今の結果状態(〈結果〉)に中心が置かれていることを表す。今に焦点が置かれていることが、副詞「今～」との共起で示される。他方、(30c)のような読みは、過去の出来事に焦点が当てられ、発話時現在より過去に終了した出来事を眺めることを表す。過去に焦点が置かれていることが、副詞「10年前」との共起で示される。

これら二つの読みの違いは、次のように表される。過去の出来事後の今に焦点が置かれた読みは、前節で示した今に焦点を置いた〈完了〉の意味構造で表される。これは、過去に生じた出来事後の変化を示す今の〈結果〉状態を表す読みとなる。

- (31) 〈結果〉の意味構造：
 〈過去時の文〉 + 「今・・・テイル」

他方、過去に起こった出来事に焦点を置いた読みは、過去を表す副詞と共に起し、その副詞が〈過去時の文〉を修飾するような意味構造であると考えられる。これは、過去に起こった出来事を発話時現在より〈回想〉する読みとなる。

- (32) 〈回想〉の意味構造：
 〈過去を表す副詞+過去時の文〉 + 「テイル」

以上のことより、(30a)の文が持つ二つの解釈は、焦点の置き方の違いによって、次のような意味構造の違いで表され、二つの読みの違いが構造的に明らかにされる。

- (33) b'. その時計は、今壊れている。
 〈その時計は壊れた〈過去時の文〉〉 + 「今・・・テイル」
- c'. その時計は、10年前に壊れている。
 〈10年前+その時計は壊れた〉 + 「テイル」

これまで見てきたことをまとめると、〈進行〉〈結果〉〈回想〉の各読みが表す条件とその意味構造は、以下のようなになる。従って、「テイル」の意味構造条件(I)を、次のように書き改める。

- (34) 「テイル」の意味構造条件(II)：
 - a. 発話時現在で、事態そのものが存在している場合：その意味構造は(〈今+現在時の文〉 + 「テイル」)であり、〈進行〉の読みが与えられる。
 - b. 発話時現在で事態が終了し、発話時現在に焦点が置かれている場合：その意味構造は(〈過去時の文〉 + 「今・・・テイル」)であり、〈結果〉の読みが与えられる。
 - c. 発話時現在で事態は終了し、その終了事態に焦点が置かれている場合：その意味構造は(〈過去の副詞+過去時の文〉 + 「テイル」)であり、〈回想〉の読みが与えられる。

ここで表記上での注意を少し述べておく。意味構造の埋め込み文内の〈今+〉と「今・・・テイル」内の「今・・・」は、意味構造上での必要な要素で必ず表記される。しかし、表層表現で現れる副詞「今～」は絶対に必要な要素というわけではでないので、必ずしも表層表現に現れるとは限らない。

この節の最後に、ここまで提案してきた意味構造によっ

て、次の「テイル」構文(35a)と(35b)の意味の違いを明らかにしてみよう。

- (35) a. 太郎は、昨晚芋を食べている。
 b. 太郎は、今芋を食べている
 c. 太郎は、芋を食べている

(35c)は異なった時の副詞と結び付くことによって、(35a)と(35b)のように〈回想〉と〈進行〉意味を表す曖昧な文である。(35a)(35b)の意味上の大きな違いは、「食べる」事態が発話時現在でいつ成立しているかによる。(35a)は発話時現在で「芋を食べる」事態そのものは終了しており、(35b)は発話時現在で事態(「芋を食べる」)そのものが存在している。すなわち、(35a)は発話時現在で事態そのものは完了・終了していることを表しているので、「テイル」構文にその終了事態を表す〈過去時の文〉が埋め込まれ、また、過去の副詞と共に起しているため、過去の事態に焦点を置いた意味構造を持つ。他方、(35b)は発話時現在で事態そのものが存在しているため、発話時現在に事態の存在を表す〈現時の文〉が「テイル」に埋め込まれた意味構造を持つ。従って、(35a)(35b)は次のような意味構造で表され、「テイル」の意味構造条件(Ⅱ)によって、(35a)は〈回想〉の読み、(35b)は〈進行〉の読みが与えられる。

- (36) a. 〈昨晚+太郎は芋を食べた〉+「テイル」
 b. 〈今+太郎は芋を食べる〉+「テイル」

以上の考察の結果、次のようなことが導き出される。「テイル」構文の曖昧性は、「テイル」に埋め込まれる文が〈過去時の文〉である場合も、〈現時の文〉である場合も、埋め込まれると中和されて時制の差が消え、同じ表現となる。そのために、「テイル」構文の曖昧性が生じる(池上(2000)参照)。

また、「テイル」に埋め込まれた文が〈過去時の文〉である場合、焦点を過去の出来事に置くと〈回想〉の読みが与えられ、今に焦点を置くと〈結果〉の読みが与えられる。従って、「テイル」構文の曖昧性が生じる要因は、次のようなことによる。

- (37) 「テイル」構文の曖昧性の要因：
 a. 埋め込み文の時制による場合：〈現時の文〉
 〈過去時の文〉共に「テイル」埋め込まれると中和され、時制の違いが消え、同一表現となる。
 b. 焦点の置き方による場合：「テイル」に〈過去

時の文〉が埋め込まれた時、次の二つの読みが可能となる。

- (i) 過去に起こった事態に焦点を置く場合と、
 (ii) 発話時現在に焦点を置く場合の読みが可能となる。

V. 継続性と意味特性「スル」と「ナル」

序節で取り上げたように、次の文(38a)の曖昧性は〈進行〉あるいは〈回想〉のいずれかの読みで曖昧であり、(38b)は〈結果〉あるいは〈回想〉のいずれかの読みで曖昧である。

- (38) a. 太郎は、芋を食べている。
 b. その時計は、壊れている。

なぜこのような曖昧性に差が生じるのか。また、どのような要因によるかを、この節で考えてみる。ここで、各読みの特徴は、埋め込み文の動詞(句)が持つどのような意味特性と整合性があるかをまず見てみよう。そして、(38a)(38b)で生じる曖昧性の要因を探ってみることにする。

〈進行〉の読みを表すためには、発話時現在で事態が存在し、しかも発話時前後でもその事態が存在していなければならない。従って、そのような事態を表すには一定の継続性を表すことの出来る動詞でなければならない。まず第一に、継続性を表す「スル」意味特性を持った動詞(句)(以下、「継続スル」型動詞と略す。)が考えられる(Vendle(1967)、Bach(1986)、Dowty(1979)、吉川・友繁(2008)参照)。

- (39) a. 太郎は、1時間海で泳いでいる。
 b. 太郎は、1時間公園で走っている。

また、継続性を表す「ナル」意味特性を持った動詞(句)(以下、「継続ナル」型動詞と略す。)がある。

- (40) a. 太郎は、徐々に回復している。
 b. 木の葉っぱが、徐々に黄色くなっている。
 c. 船は、徐々に海底へ沈んでいる。

次に、〈結果〉の読みについて考えてみよう。〈結果〉は、発話時現在で事態・出来事後に状態変化が生じ、発話時現在での変化・結果に焦点が置かれている読みである。その事態を表すには、意味特性「ナル」を持っている動詞でなくてはならない。すなわち、〈結果〉の読みを表すには、意味特性「ナル」を持つ動詞によって表さ

れる必要がある。従って、〈結果〉の読みを表すには、「ナル」特性を持った動詞に限定される。

〈回想〉の読みについて見てみよう。〈回想〉は、発話時現在以前に事態が終了し、その終了した事態に焦点を当て、その事態を発話時現在より眺めることを表している。そのため、〈回想〉の読みを許す動詞は、事態が終了することを表す動詞でなくてはならない。すなわち、〈回想〉の読みを表す動詞は、状態を表す動詞であってはならない。状態動詞が、〈過去の文〉として「テイル」構文に埋め込まれた場合、状態の終了を表すのではなく、始まりを表すからである。

(41) 太郎は、大阪に10年前から住んでいる。

従って、三原 (1997) が言う〈回想〉(三原では、効力持続)の読み「テイル」構文はいかなる動詞からでも作り出されるということにはならない。この読みを表すためには、意味特性「スル」もしくは「ナル」を少なくとも一つ持っている動詞でなくてはならない。つまり、「スル」「ナル」のいずれの意味特性も持たない状態動詞であってはならない。

以上のことより、〈進行〉〈結果〉〈回想〉の読みと「テイル」構文内に埋め込まれる文の動詞とは、次のような関係にある。すなわち、〈進行〉の読みを表す「テイル」の埋め込み文内の動詞(以下、〈進行〉の読みの動詞と略す。)は、瞬間的動作・作用を表すのではなく、継続的動作・作用を表す「スル」もしくは、「ナル」の意味特性を持った動詞である。⁴

(42) 〈進行〉の読みの動詞：継続性を表す「スル」もしくは、「ナル」型動詞

〈結果〉の読みを表す動詞は、事態後に一つの状態変化を表す動詞に限られる。そのような動詞でない場合、発話時現在で状態変化後の結果状態を表すことが出来ないためである。すなわち、意味特性「ナル」を持つ動詞である。

(43) 〈結果〉の読みの動詞：「ナル」型動詞

〈回想〉の読みは、過去に事態が終了し、その事態を発話時現在より眺めることを表すため、事態の終了を表すことの出来る動詞である。すなわち、事態の終了を表すためには、「スル」もしくは、「ナル」の意味特性を持つ動詞でなくてはならない。(「スル」と「ナル」のいずれの意味特性も持たない状態動詞(吉川・友繁

(2008)参照)であってはならない。)従って、「スル」と「ナル」のいずれの意味特性も持たない状態動詞(Dowty (1979)、吉川・友繁 (2008))は、「テイル」構文で〈回想〉の読みを表すことが出来ない。

(44) 〈回想〉の読みの動詞：「スル」もしくは、「ナル」意味特性を少なくとも一つ持つ動詞

VI. 「今～ている。」表現の意味

本節では、序節で問題として取り上げた次の三つの「今～ている。」表現の違いと、違いを生み出している要因を見てみよう。

(45) a. 太郎は、今旅をしている。
b. その時計は、今壊れている。
c. 船は、今沈んでいる。

最初に、各動詞「旅をする」「壊れる」「沈む」の表す意味特性の違いから見てみよう。「壊れる」と「沈む」は意味特性「ナル」を持ち、「旅をする」は「ナル」特性を持たない。一方、「旅をする」には「スル」の意味特性があり、「壊れる」と「沈む」にはその特性がない(Dowty (1979)、吉川・友繁 (2008)参照)。

(46) a. 「壊れる」「沈む」：「ナル」型自動詞
b. 「旅をする」：「スル」型自動詞

このことは、「壊れる」「沈む」が「テイル」に埋め込まれた場合、〈結果〉の読みを表すことが出来、「旅する」は出来ないことを示している。

(47) a. 今旅をしている：〈結果〉の読み不可
b. 今壊れている：〈結果〉の読み可
c. 今沈んでいる：〈結果〉の読み可

次に、「旅をする」「壊れる」「沈む」の三つの動詞間での意味特性「スル」「ナル」以外での共通点及び、相違点を見てみよう。「旅する」と「沈む」の間には、共通点が見られ、これらの動詞と「壊れる」には相違点が見られる。その共通点は、継続性という点で、「壊れる」にはこの継続性という特性は見られない。この継続性に対比する特性を瞬間性と呼ぶ。

(48) a. 「旅をする」「沈む」：継続型
b. 「壊れる」：瞬間型

継続性の有無は、「テイル」構文で〈進行〉の読みを表すことが出来るかどうかを決定する要因である。従って、「沈む」「旅をする」は「テイル」構文で〈進行〉の読みが可能となり、「壊れる」はその読みが不可となる。

〈回想〉の読みは、意味特性「スル」もしくは「ナル」を少なくとも一つ持つ動詞に適用される。従って、これら三つの動詞で作られる「テイル」構文は、〈回想〉の読みが可能となる。

以上のことより、「旅をしている。」「壊れている。」「沈んでいる。」の各「～ている。」表現は、次のような意味構造で表される読みとなる。

- (49) a. 太郎は、旅をしている。
 a-1. 〈今+太郎は旅をする〉+「テイル」
 a-2. 〈以前+太郎は旅した〉+「テイル」
 b. その時計は、壊れている。
 b-1. 〈その時計は壊れた〉+「今…テイル」
 b-2. 〈以前+その時計は壊れた〉+「テイル」
 c. 船は、沈んでいる。
 c-1. 〈今+船は(海底へ)沈む〉+「テイル」
 c-2. 〈船は(海底に)沈んだ〉+「今…テイル」
 c-3. 〈以前+船は(その海峡で)沈んだ〉+「テイル」

(49a-1)～(49c-3)で示された意味構造により、「今～ている。」表現をなす場合、「今旅をしている。」は一つの意味構造、「今壊れている。」は一つの意味構造、「今沈んでいる。」は二つの意味構造が可能である。従って、(49a)の「今～ている。」表現は〈進行〉の読み、(49b)の表現は〈結果〉の読み、(49c)の表現は〈進行〉と〈結果〉の読みが可能となる。

- (50) 「太郎は今旅をしている。」：〈今+太郎は旅をしている〉+「テイル」⇒〈進行〉
 (51) 「その時計は今壊れている。」：〈その時計は壊れた〉+「今…テイル」⇒〈結果〉
 (52) a. 「船は今沈んでいる。」：〈今+船は沈む〉+「テイル」⇒〈進行〉
 b. 「船は今沈んでいる。」：〈船は沈んだ〉+「今…テイル」⇒〈結果〉

Ⅶ. まとめ

序節で問題として取り上げた文(5a)が持つ三つの読みの要因と、その各読みの意味構造を示すことで、本稿のまとめとする。

- (53) 太郎は、アメリカに行っている。(=(5a))

この表層表現内の「アメリカに行く」の動詞句の意味特性を、まず最初に調べてみよう。この動詞句は、その内部に格助詞「に」によって着点が表されており、位置変化を表している。そのために、「ナル」型であることが分かる。また、継続性も示しているので、この動詞句は「継続ナル」型であると分かる。

- (54) 「アメリカに行く」：「継続ナル」型

「継続ナル」の意味特性の継続性によって、事態そのものが過去から継続して発話時現在でも存在することを表すことが出来るため意味構造(55a)となり、〈進行〉の読みとなる。また、「ナル」の意味特性によって、発話時現在で、事態後に生じる状態変化を表すことが出来る。そのために、意味構造(55b)となり、「テイル」構文で〈結果〉の読みとなる。さらに、動詞が「スル」もしくは、「ナル」の意味特性を少なくとも一つ持つ時、発話時現在で事態が完了し、その完了事態に焦点が置かれると、意味構造(55c)と分析され、〈回想〉の読みが与えられる。

以上のことより、「アメリカに行っている。」は、下記に示されるような意味構造で表される三つの読みが可能となる。

- (55) a. 〈今+太郎はアメリカに行く〉+「テイル」
 = 〈進行〉の読み = (5b)
 b. 〈太郎はアメリカに行った〉+「今…テイル」
 = 〈結果〉の読み = (5c)
 c. 〈以前+太郎はアメリカに行った〉+「テイル」
 = 〈回想〉の読み = (5d)

「テイル」構文である「アメリカに行っている。」表現を曖昧性の観点より見ると、埋め込み文の時制によって起こる曖昧性((56a-1)と(56a-2)の曖昧性)と、過去時の文が埋め込まれた時、焦点の置き方によって起こる曖昧性((56b-1)と(56b-2)の曖昧性)によって生じる三つの読み、すなわち、(56a-1)(56b-1)(56b-2)が可能となる。以下に、(53)(=(5a))における「テイル」構文の曖昧性について意味構造で示しておく。

- (56) 「テイル」構文の曖昧性
 a. 埋め込み文の時制によって生じる曖昧性：
 a-1. 埋め込み文が現在時制の時：

〈今+現在時の文(今アメリカに行く)〉+「テイル」

a-2. 埋め込み文が過去時制の時:

〈過去時の文(アメリカに行った)〉+「テイル」

b. 埋め込み文が〈過去時の文〉である時、焦点の置き方によって生じる曖昧性:

b-1. 焦点を発話時現在に置いた時:

〈過去時の文(アメリカに行った)〉+「今…テイル」

b-2. 焦点を過去に生じた出来事に置いていた時:

〈過去の副詞+過去時の文(以前アメリカに行った)〉+「テイル」

(注)

¹ 本稿では、次のような状態を表す「～ている。」表現については、特に取り扱わないでおく。

- a. この家は、西を向いている。
- b. 大きな山が、そびえている。

² この目的語の状態変化結果に関しては、別稿で取り組むことにする。

³ ここで、表記の仕方について注意すべき点を記しておく。「今…テイル」と「今～ている。」は、異なることに注意。前者は意味構造上での表記であり、後者は表層言語表現(表層表現と略す。)である。すなわち、「今」を表層表現では「今～」と表し、意味構造上の表記では「今…」もしくは、〈今+〉と表し、表層表現と意味構造の表記を区別している。

⁴ 瞬間的動作・作用を表す動詞句が「テイル」に埋め込まれた場合、繰り返しの動作・作用を意味する。瞬間的動作の繰り返しにより、継続性が出るためである。詳細は、三原(1997)、高見・久野(2006)参照。

参考文献:

- 安藤貞雄(1983)『英語教師の文法研究』大修館書店。
池上嘉彦(編)(1996)『英語の意味』大修館書店。
池上嘉彦(2000)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
今井邦彦(1995)『英語の使い方』大修館書店。
上野誠司・影山太郎(1996)「移動と経路の表現」影山太郎(編)『動詞の意味と構文』40~67。
影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版。
影山太郎(編)(2001)『動詞の意味と構文』大修館書店。
影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社出版。
岸本秀樹(1996)「壁塗り構文」影山太郎(編)100~126。
金田一春彦(編)(1976)『日本語のアスペクト』むぎ書房。
鈴木重幸(1976)「日本語の動詞のすがた(アスペクト):~スルの形と~シテイルの形」金田一春彦(編)『日本語のアスペクト』83~95。

- 高見健一・久野暉(2006)『日本語機能的構文研究』大修館書店。
藤井 正(1976)「動詞+ている」の意味」金田一春彦(編)『日本語のアスペクト』97~116。
水谷静夫・石綿敏雄・萩原孝野・賀来直子・草薙裕(1983)『文法と意味』朝倉書店。
水谷信子(2002)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版。
三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」鷺尾・三原『ヴォイスとアスペクト』108~184。
吉川武時(1976)「現在日本語のアスペクトの研究」金田一春彦(編)115~328。
吉川 洋(2004)『イベント意味論における項とアスペクト』姫路工業大学環境人間学部研究報告第6号、153-166。
吉川 洋(2005)『達成タイプ動詞句の二項イベント分析』兵庫県立大学環境人間学部研究報告第7号、205-212。
吉川 洋・友繁義典(2008)『英語の意味とニュアンス』大修館書店。
鷺尾龍一・三原健一(1997)『ヴォイスとアスペクト』研究社出版。

REFERENCES:

- Bach, Emmon (1986) *Informal Lectures on Formal Semantics*, State University of New York.
Davidson, Donald (1980) *Essays on Actions & Events*, Oxford University Press, London.
Dowty, David (1977) "Toward a Semantic Analysis of Verb Aspect and the English 'Imperfective' Progressive," *Linguistics and Philosophy* 1, 45-78.
Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
Higginbotham, James. (1995) *Sense and Syntax*, Clarendon Press: Oxford.
Krifka, Manfred (1989) "Nominal Reference, Temporal Constitution, and Quantification in Event Semantics," *Semantics Contextual Expression*, ed. by Renate Bartsh, Johan van Benthem, and Peter van Emde Boas, 75-116, Foris, Dordrecht.
Krifka, Manfred (1998) "The Origins of Telicity," *Events of Grammar*, ed. by Suzan Rothstein, 197-236, Kluwer, Dordrecht.
Kearns, Kate (2000) *Semantics*, St. Martin's Press, London.
Kearns, Kate (2003) "Durative Achievement and Individual Predicates on Events," *Linguistics and Philosophy* 26, 595-635.
Landman, Fred (1992) "The Progressive," *Natural Language Semantics* 1, 1-32.
Parsons, Terence (1985) "Underlying Events in the Logical Analysis of English," *Action And Events*, ed. by Ernest LePore and Brian MacLaughlin, 235-267, Blackwell, Oxford.

- Parsons, Terence (1989) "The Progressive in English : Events, States and Processes," *Linguistics and Philosophy* 12, 213-242.
- Parsons, Terence (1990) *Events in the Semantics of English*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*, Blackwell Publishing, MA.
- Singh, Mona (1998) "The Semantics of the Perfect Aspect," *Natural Language Semantics* 6, 169-199.
- Taylor, Barry (1977) "Tense and Continuity," *Linguistics and Philosophy* 1, 199-220.
- Tenny, Carol (1992) "The Aspectual Interface Hypothesis," *Lexical Matters*, ed. by Ivan Sag and Anna Szabolsci, 1-28, CSLI Publication, Stanford, CA.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca.
- Yoshikawa, Hiroshi (2003) "A Semantic Analysis of Accomplishment on the Basis of Event Semantics," *English Linguistics* 20:2, 535-561.
- Zucchi, Sandro (1999) "Incomplete Events, Intensionality and Imperfective Aspect," *Natural Language Semantics* 7, 179-215.
- Zucchi, Sandro and Micheal White (2001) "Twigs, Sequences and Temporal Constitution of Predicates," *Linguistics and Philosophy* 24, 223-270.

(平成22年 9 月22日受付)